

[論文]

『西東詩集』：「ハーフィズの巻」について（I）

鈴木 邦 武

ゲーテの日記の中で最初にハーフィズのことに触れているのは1814年6月7日の記述の中であった。その頃彼はヴァイマル近郊の保養地ベルカに滞在していたが、その間の5月18日に出版社社主コッタの訪問を受け、その際同社から出版されたばかりのハマー＝ブルクシュタルによるドイツ語訳の『ハーフィズ詩集』を贈呈されたものと思われる。¹⁾

『年代記』の「1815」の項の冒頭でゲーテは以下のように述べている。

「既に前年にフォン・ハマー訳のハーフィズの全詩集が私のもとに届いていた。以前には時折雑誌などに翻訳されて紹介されていたこの素晴らしい詩人の個々の作品からは何も得ることが出来なかったが、この度まとまったものとして手に取って見るとそれだけ一層強烈に私に影響を及ぼしてきた、そして私はそれに対して創作的態度を取らざるを得なかった。そうでもしなければ私はこの強力な現象の前で持ちこたえることが出来なかったであろう。その影響はあまりにも強かった、また、ドイツ語の翻訳も手もとにあった。そのような訳で私はそれに自ら参画しないではいられなかった。素材や趣旨の点で私のもとにとっておかれ、養い育てられてきた似たと

ころのある全てのものが頭をもたげてきたが、このことは、公的にも内的にも危機に瀕していた現実の世界から、それへの楽しい参加、私の欲求、能力、意志に委ねられている理想の世界に逃れるということが、私には極めて必要になっていたので、尚更のことであつた。」²⁾

『西東詩集』の中の「愛の巻」の6番目の詩「おぼれる」と題された詩は、はじめは題を付されずに制作されているがその成立は1814年5月19日だろうとされているので、ドイツ語訳『ハーフィズ詩集』を手にした直後の作と見てよいだろう。

おぼれる

縮れた巻き毛の豊かなまるい頭
そのふさふさした髪を
両手いっぱい掻きなでることができたら
わたしは心の底から元気になるのです
そして額や眉や目や口にキスすると
心はずみまた痛むことにもなるのです
5本歯の櫛、それはどこで止まったらよい
のでしょうか
もうまた縮れ毛のとろに戻ってしまうので

す
耳もこの戯れを拒みません
ここは肉でもなく、皮膚でもありません
戯れにはとても感じやすく、愛情に満ちて
います
でも、可愛い頭を掻きなでているうち
こんなにもふさふさした髪の毛なかで
この手を止めることはできません
ハーフィズよ、あなたもかつてはそうなされ
た
わたしたちは改めてそれを始めるのです³⁾

この詩は特別ハーフィズの詩（ガザル）の
どれかと結びつくということではないが、詩
全体の感じがハーフィズのガザルを思わせる
ものを持っている。恋人の顔立ちの特徴につ
いてはハーフィズの中でも度々繰り返されて
いて、特に巻き毛は頻繁にでてくる。例え
ば、黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』の

50番目「心は自らそなたの巻毛の罫に陥つ
た」

54番目「ライラーの巻毛の縋れの中にマジ
ュヌーンは住む」

62番目「彼女の巻毛は罫、その黒子（ほく
ろ）は罫の穀粒」

66番目「恋人の巻毛から微風（そよかせ）
が吹くかの地では」

など。また、ガザルでは普通結びの対句に詩
人の雅号を読み込むことになっていて、ハー
フィズの場合もそれが行われているが、上の
詩でもそのことが踏襲されていて、ハーフィ
ズに呼びかける形でハーフィズの名があげら
れている。相当にハーフィズを意識した作品
になっているといえる出来上がりである。

ハーフィズは、本名をシャムス・アルディー

ン・ムハンマド (Shams al-Din Muhammad)
と言い、イスラーム暦726年（西暦1325-26）
シーラーズに生まれた。早くから「コーラン
を暗記している者」を意味する「ハーフィ
ズ」という雅号を用いているので、若くして
教養を身につけていて、コーランに通じてい
たものと見受けられる。彼の父はバハー・ア
ルディー（Baha al-Din）あるいはカミー
ル・アルディー（Kamil al-Din）と言
い、かなり裕福な商人であったらしいが、イス
ファハーンからシーラーズに移り住んだ後、
詩人が幼少の頃亡くなってしまい、家族は困
窮に陥ったようで、ハーフィズは青年期には
パン屋の見習いになったり、原稿の筆耕など
をして生計を立てていたが、30歳前に賛辞詩の
詩人として頭角を表したようである。

ハーフィズの時代イランの地域はモンゴル
族のイル・ハン国の一部となっていた。モン
ゴル族は自分たちの遊牧民としての生活を堅
持しながら、征服した地域の統治はその地域
の被征服者に任せるところがあったが、シー
ラーズおよびファールス州の太守に任命され
たのはインジュー家のマフムード・シャーで
あり、その末子で次の太守になったアブー・
イスハークに青年期のハーフィズが仕えるこ
とになる。

ハーフィズは自由に生きることを好んだ詩
人で、神秘主義詩人と言われているが、それ
も宗教的儀礼、形式、伝統に拘束されたその
時代の神秘主義者たちとは異なり、そのよう
な形式的なものに囚われない本来の真の神秘
主義詩人であった。また、彼は自分のことを
「リンド」と呼んでいたようである。「リ
ンド」は、ユンカーとアラヴィの『ペルシア
語・ドイツ語辞典』では、Zechbruder（大

酒のみ)、Prasser (ぜいたくざんまいに暮らす人)、Gaurer (ならず者)、Schelm (悪者)、Schlauberger (抜け目のないやつ)、Mystiker (神秘主義者)、Sufi (スーフィー教徒)、Libertiner (放とう者)と訳されている。

そのハーフィズが、詩人・文人を保護し、どちらかというとな楽的な人物であったアブー・イスハークに仕え保護を受けることが出来たことは、幸運であったといえる。ハーフィズは彼の詩の中でもアブー・イスハークのことを取り上げている。例えば、

邦訳『ハーフィズ詩集』207番目の詩

そなたの小径がわが住いであり
そなたの戸口の土で目の輝きを得た頃が忘れられない

まさに百合と薔薇の如く清い交りの結果
そなたが思ったことを私は口にした

(注：恋人の思ったことが分り、私がそれを話したの意)

心が知性の老人から学んだことを語ると
愛は心に難しいことを説明してやった
ああ、この陥穽の世にある暴虐と圧迫
ああ、あの宴にあったかの恵みと好意

(注：アブー・イスハーク王の宴を指す)

恋人なしでは決していまいと心で思ったが
私と心の努力が無に帰しては何ができよう
昨夜私は飲み仲間を思い出し酒場に行った
酒壺を見ると、心には血、足には泥があった

(注：中に紅い酒があり、底は土の上にあったの意)

別離の苦しみの理由(わけ)を尋ねようと
多く廻ったが

知性ある法官(ムフティー)もこの問題については無知だった

確かにアブー・イスハーク王のトルコ石の指環は

よく輝いたが(注：アブー・イスハークの治世は栄えたの意)、幸運は早く過ぎ去った

ハーフィズよ、そなたは気取って歩むかの
鷓鴣の笑いを見たが

(注：王の楽しい笑いの意)

彼は運命の鷹のかぎつめに気づかなかった⁴⁾

この詩の最後の1行は、アブー・イスハークの没落のことに触れているのだが、アブー・イスハークはシーラーズ、ファールス州の支配だけでは満足せず、ヤズド、ケルマーンといった周辺の地域をも獲得しようとして攻め入り、そこの支配者であったムザッファル朝のムバリーズ・アル・ディーーン・ムハンマドと争い、3度にわたる攻防の末、アブー・イスハークは破れ殺害されるに至る。それと共にハーフィズの住むシーラーズはムバリーズ・アル・ディーーン・ムハンマドの支配下に入る。

この新しい支配者ムバリーズ・アル・ディーーン・ムハンマドは、飲酒を禁止して酒場を閉鎖し、歌舞音楽も禁止するなど厳しい禁欲政策を取ったため、自由奔放な思想をもち、酒も好んだハーフィズにとっては苦難の時期であった。これは1353年にはじまるのだが、その5年後の1358年にムバリーズは息子シャー・シュジャーに捕らえられて盲目にされ王位の座を奪われることになってしまう。

ムバリーズに代って支配者となったシャー・シュジャーの長い統治の間(1358-84)

は、政治的に決して平穩というわけでもなく、ハーフィズにとっても継続的な繁栄と成功の時期とは決していえないが、最も成熟した制作の時期に符合する時期でもあった。彼の名声がペルシア中に知れ渡り、西はアラビア語を話す地域、東はインドにまで広がったのもこの頃であった。シャー・シュジャーは自らも詩を作り、詩人や学者を保護し、酒場の再開を許すなど寛大な政策を取ったのでシーラーズの街は再び活気を取り戻した。ムバリーズが支配する時代には宮廷から遠ざかっていたハーフィズは、シャー・シュジャーの時代になると再び宮廷に出仕するようになり、王の政策、治世を称える詩を多く残している。

邦訳『ハーフィズ詩集』より、292番目の詩

シャー・シュジャーの威厳と栄光の壮観に
誓って
私は富と地位のためにだれとも争わぬ
手作りの酒はもう十分、酒場の酒を持ち来たれ
飲み相手が到着した、後悔の友よ、さらば
どうかわが弊衣を酒で洗い清めよ
この状態(サマ、注:禁欲の状態をさす)
では私はよい香りをかけぬ
見よ、音楽を聴くのを許さなかった者が
豎琴の調べに合せ踊りながら行く
私は従順な下僕(シモベ)、そなたは服従
させる王
この恵みに感謝して恋い慕う者たちを見よ
私はそなたの酒杯の一飲み恵みに渴しているが
そなたに頭痛を与えるほどの勇氣はない

神よ、ハーフィズの顔と額を
シャー・シュジャーの偉大な宮殿の土から
離し給うな⁵⁾

しかしハーフィズはおよそ1366年から1376年の10年間シャー・シュジャーの宮廷から遠ざけられていたと一般に受け止められている。その間彼はイスファハーンやヤズドなどで主君を求めて過ごしたらしいが、その目的も達せられず望郷の念にかられて帰国する。ハーフィズがシャー・シュジャーの寵愛を受けられなくなった理由は明らかではないが、一般的に伝えられていることは彼の放とう的な考え方や行動によるということである。

その後時々王やジャラル・アル・ディーン・トゥーラーンシャーという宰相の寵愛を受けえたこともあったようだが、以前のような宮廷での安定した地位を得ることは出来なかった。

1384年シャー・シュジャーが没し、その後王位に就いたシャー・マンスールのもとでハーフィズ再び出仕を許され、この王を称える賛歌を残すが、シャー・マンスールがティームールの攻撃を受けてムザッファル朝最後の王として滅びる(1393年)少し前の1390年に他界する。

ゲーテがハーフィズを知るのは専らハマー=プルクシュタルを通してであった。ハマー=プルクシュタルは『ハーフィズ詩集』の他に、『200人のペルシア詩人の名詩選によるペルシア文学史(Geschichte der schönen Redekünste Persiens, mit einer Blütenlese aus zweihundert persischen Dichter)』や『オリエントの宝庫(Fundgruben des Orients)』に収められたハーフィズ関係の論文でハー

フィズを紹介している。

ゲーテは、上にあげた「おぼれる」と題する詩を制作したほぼ1年後の1815年5月16日シュトゥットガルトの出版社主コッタ宛ての、実際には発信されなかった書簡の草稿の中で、『西東詩集』の原形ともいべき詩集の出版を依頼する文を書き、そこでかなり詳しく、出来上がる予定の作品について説明している。

「実は、私は暫く前から密かにオリエントの文学を研究しております、この文学を更に深く知るために、オリエントの心と方法によって、いくつかの詩を作りました。そうすることによって、私は大胆に東方と西方、過去のものとして現在のもの、ペルシアのものとドイツのものを結びつけ、この両者の習慣や考え方を相互にかみ合わせようと思うのです。貴下が、昨年ご恵与くださったハーフィズの翻訳に、私は改めて啓発され、私の手もとにかなりの作品が出来上がりまして、これは将来次のような表題で登場することになるかと思えます。

ペルシアの詩人ムハマッド・シャムス・エディーン・ハーフィズの詩集との緊密な関連を保った、ドイツの詩集」⁶⁾

こう書いた後に、この詩集のモットーとして考えたのであろうか、現在は『西東詩集』「ハーフィズの巻」のプロローグとなっている次の詩をあげている。

言葉は花嫁と呼ばれ
精神は花婿と呼ばれんことを
この婚礼を知るのは
ハーフィズを称える人々⁷⁾

更に、この書簡の草稿は、この詩集を制作した意図や内容を説明し、遠い異国の、昔の詩人は、ごく限られた教養のある人々にしか受け入れられないのではないかという出版社の危惧にも配慮して、オリエントの詩の心を、一般の読者にも受け入れられるような、魅力あるドイツの詩編の中に特色ある新たな姿で再生させて見せるつもりであるという意欲も明らかにしている。

「上にあげましたハーフィズの外に、オリエントの詩歌、文芸一般についても考慮を払い、ムアッラカートやコーランからジャーミーまで、更には、トルコの詩人までも除外することなく注目いたしました。また、私はヨーロッパにおいてこれらの文学に貢献した優れた人々にも、その一人一人に、それぞれに応じて詩的記念碑を、生存している人々にも、故人になられた人々にも打ち立てるよう考慮いたしました。勿論、その場合旅行者の役割も無視しませんでした。そのことがこの作品に多様性をあたえております。

私はこのドイツの詩集をポケット版の形にして多くの人々の手に渡ることを希望しているわけですが、ただ、それには今少し時間が必要でして、もうすこし肉付けしなければなりません。しかし、貴下にこのことを予めお知らせいたしますのは、この目的のために、既に色々な準備も出来ており、また、更に準備をしなければならないからでもございます。例えば、貴下は、ハーフィズのハマーによる翻訳を印刷し出版なさいました。それ自体大変称揚すべき仕事であり、私にも非常に価値のあるものでございますが、それにもかかわらず読者を見出しえないのは、そのあり様、その志操、その詩風において、あまりに

も、われわれのものとかげ離れていると思われるからでございます。(中略)

私の詩集は、数節からなる、比較的長い詩がおよそ100編と、8行あるいはそれ以下の行の、比較的短い詩が、ほぼ同数からなっております。』⁸⁾

このように制作の意図や内容を説明し、遠い異国の古い詩人は、ごく限られた教養のある読者にしか受け入れられないのではないかという出版社の危惧にも配慮してオリエントの詩の心を一般の読者にも受け入れられるような、魅力あるドイツの詩編の中に、特色ある新たな姿に再生させて見せるつもりであるという意欲も明らかにしている。

このコッタ宛ての手紙には、ヴァイマルと発信地が示されているが、その末尾に、ヴィースバーデンに旅立つ予定であること、そして、そちらの方に、何らかの返事を聞かせて欲しいと述べているように、ゲーテは、日記によると、1814年5月21日と22日に旅の準備をし、5月23日に荷造りをし、5月24日早朝5時にヴァイマルを出発し西に向かい、その日の午後3時にアイゼナハに着き、翌5月25日にそこを立ち、夕方6時半にフルダに到着、翌日そこを立ち夜8時にフランクフルトに到着、5月27日8時45分フランクフルトを出て午後1時半ヴィースバーデンに到着している。そして、この間も彼がオリエントの事柄に関心を持ち続けていたことは、日記の端々に窺われる(5月16日と17日にオリエントの事柄、18日ドイツに宛てて荷造り、19日エルプロ(デ・モランヴィル)とカープス書、24日オリエントの事柄)。そして、日記には5月27日詩集を整理、28日詩集、目次、詩集の続き、29日詩集に番号を付す、30

日詩集の目次という記述がみられる。こうして出来上がったのが「ヴィースバーデン目次表」と呼ばれるもので、1814年5月19日最初の詩が出来上がってからその日に至るまでに作成された100編の詩からなる「ドイツ詩集(der deutsche Divan)の目次表」である。

しかし、この詩集は出版されることはなかった。コッタ宛ての書簡の中でも触れられているように、ゲーテ自身まだ時間をかけてもっと肉付けしなければならぬと考えたためであろうか、そして、エッカーマンが、ゲーテの言葉として伝えているように、「作品が完成する前に外部に漏らすことを嫌ったために」⁹⁾上記の手紙も発送されなかったであろうか。

その後彼がライン・マイン・ネッカー地方を辿り歩いている間に「ドイツ詩集」も膨れ上がり、コッタに送ろうとした手紙の中で紹介されていたものとはずいぶん違ったものになっていった。1814年10月6日の日記の中では「ドイツ詩集を各巻に分ける」¹⁰⁾となっており、また、10月29日付ツェルター(Karl Friedrich Zelter, 1758-1833)宛ての、この旅行での収穫について語った書簡のなかでも、「それぞれの内容に応じて、各巻にわけられることもできる」¹¹⁾と伝えている。このことは『年代記』の1815年の項でも触れられているが、これをどのように分類したかについては、その後、1816年2月3日に原稿を書いて¹²⁾、同月の24日付けの『モルゲンブラット』に掲載されたものが、公になるまでは、明らかにされることはなかった。

この『モルゲンブラット』に載せられた広告の中で、書名も『西東詩集(West-Oestlicher Divan oder Versammlung deutscher

Gedichte in stetem Bezug auf den Orient)』と決まり、13の巻に分類され、「詩人の巻 (Moganinameh, Buch des Dichters)」、
「ハーフィズの巻 (Hafisnameh, das Buch Hafis)」、「愛の巻 (das Buch der Liebe)」、
「友人の巻 (Das Buch der Freunde)」、「考察の巻 (Das Buch der Betrachtung)」、「不平不満の巻 (Das Buch des Unmuts)」、
「ティームールの巻 (Timurnameh, Buch des Timur)」、「箴言の巻 (Das Buch der Sprüche)」、
「寓意の巻 (Das Buch der Parabeln)」、「ズライカの巻 (Das Buch Suleika)」、「酌とりの巻 (Sakinameh, Buch des Schenken)」、
「拝火教徒の巻 (Buch des Parsen)」、「天国の巻 (Das Buch des Paradieses)」という
タイトルが付けられた¹³⁾。

しかし、このような予告があつてからも、中々発刊には至らず、出来上がったものうち幾編かは何回かにわたって雑誌に分載されたが、全巻の印刷が終了したのは、1819年8月に入ってからであった。

こうして出来上がった『西東詩集』初版本では、「友人の巻」は欠けて、最初の「詩人の巻」は「歌人の巻 (Buch des Sängers)」と改められ、「ティームールの巻」は「箴言の巻」の後に、「寓意の巻」は「酌とりの巻」の後に移された。

そして、ゲーテの心をこの詩集制作へと駆り立てたハーフィズに捧げられた「ハーフィズの巻」は2番目に収められ、この巻のプロローグとして前に引用した次の詩句が掲げられた。

言葉は花嫁と呼ばれ
精神は花婿と呼ばれんことを

この婚礼を知るのは
ハーフィズを称える人々

この中にわれわれはオリエントの精神と西洋の言葉との婚礼を願う詩人の願いを感じ取ることができるのだが、この詩句はハマール＝ブルクシュタルが彼の訳した『ハーフィズ詩集』の第1巻と第2巻の扉に挙げた次の詩句に基づいている。

言葉の花嫁の巻き毛が
縮らされて以来
ハーフィズのように思想のヴェールを
はずした者は誰もいない¹⁴⁾

この詩句は『ハーフィズ詩集』の「ダールの章」の109番目の詩の最後の部分からの引用である。そこの部分にハマール＝ブルクシュタルは脚注を付して、「逐語的には言葉の花嫁の巻き毛の頂上が梳かされて以来、思想の類からヴェールを取り除いたのはハーフィズのみであるということになる¹⁵⁾」としている。

「ハーフィズの巻」の1番目の詩は「あざ名 (Beiname)」と題されて、この名の由来についてドイツの詩人とハーフィズとの対話の形で示される。

あざ名

詩人

モハメド・シャムス・ウツ・ディーニよ、
語ってください
なぜあなたの尊い民が
あなたをハーフィズと名づけたのですか

ハーフィズ

私はあなたの質問に敬意を示し
それに答えましょう
記憶力に恵まれて
コーランの聖なる遺訓を
一語も違えることなく心に刻みこんでおり
それで大変敬虔に振舞い
汚れた世間の悪事が
自分にも、預言者の言葉と
種子をそれ相応に尊ぶ人々にも
降りかからないようにしているからです
ですから人々は私にその名をあたえたので
す

詩人

ハーフィズよ、だからこそ、私はあなたに
負けたくはない
そう私には思われます
なぜなら、他人と同じ考え方をすれば
われわれはその人々と似てくるのです
ですから、私はあなたにそっくりなのです
あの布の中の布の上に
主の御姿が写し出されたように
私はわれわれの聖なる書の
聖なる像を自分に受け入れています
否定と妨害と掠奪にもかかわらず
信仰の明るい像によって
静かな胸の中で力づけられます¹⁶⁾

ハーフィズの自己紹介を受けて、西方の詩人は、それに深い敬意を表しつつ、その敬虔さという点で、ハーフィズに劣らない態度を示そうとする。ハーフィズがコーランに通じていると同じくらい、西方の詩人ゲーテは聖書を深く理解しているという自信を持って

る。オリエントの詩人ハーフィズとドイツの詩人ゲーテは、まず聖典に対する深い理解という点で共通点を示すわけである。

ところで、この詩の最初の部分については、ハマー＝ブルクシュタルの『ハーフィズ詩集』への序文に拠っている。つまり、ハーフィズの名前とあざ名について次のように述べられている。

「コーランをすみからすみまで暗記していたためにハーフィズ、つまり、コーランを記憶している人というあざ名で呼ばれているムハメド・シャムス・エディン（信仰の太陽）はシーラーズに生まれた。」¹⁷⁾

「ハーフィズの巻」の2番目の詩は「訴え」と題されている。

訴え

君たちは一体知っているのだろうか、悪魔が誰を
荒野の岩と壁の間で待ち伏せして
チャンスを掴むや、誘惑しつつ
地獄へ連れ去ろうとしているのかを
それは、嘘つきと悪人のこと

詩人は、何故避けないのか
このような連中と関わり合うのを

一体、誰と共に行き、歩いているのか、
知っているのか
常にただ妄狂にかられているだけの詩人は
彼は、勝手気ままな愛のため、果てしなく
荒野の中へと追いやられ
砂の中に書かれた彼の嘆きの詩は
たちまち風に吹き消されてしまう

彼は、自分の言うことを理解しない
自分の言うことを守ることもないだろう

それなのに、それがコーランに反すること
があっても

人々はいつの時も彼の歌を流行らせる
さあ教えてくれ、君たち法典に通じている
人々よ

賢明で敬虔、かつ、学識のある人々よ
貞節なイスラーム教徒の不変の務めを

とりわけハーフィズは憤激を巻き起こす
ミルザは人々の心を不安に落とし入れる
言ってくれ、何をなすべきか、そして何を
止めるべきなのかを¹⁸⁾

この詩の前半はコーラン26章221節以下の部分
がもとになっている。井筒俊彦訳（岩波文庫、
『コーラン』中、226ページ）の221節から225節
までは以下のようになっている。「これ、シャイ
ターン（サタン）に憑かれた人というのをお前
たちに教えようか（お前たちはマホメットのこ
とを悪霊に憑かれた人間だなどと言うが、本
当の物憑きは別にいる）。まず罪深い詐欺師は
みな憑かれている。一心に聴き入っておる（悪
霊の語りかけに耳を傾けている）。だが大抵は
贖物だ。次に詩人たち（詩人はその靈感を悪霊
から受ける）。あれ、迷わされた人間どもがぞろ
ぞろ後について行く。汝（マホメット）見たこ
とはないか、彼ら（詩人たち）が谷間のあたりを
さまよい歩いて、自分では決してやりもせぬこ
とをやたらに口走っているところを。」

この部分については、ハマー＝ブルクシュ
タルが『オリエントの宝庫』の中で試みた

コーランの部分訳では以下のようになってい
る（こちらでは220節から225節）

220 Soll ich dir sagen auf wen die
Teufeln niedersteigen?

221 Sie steigen nieder auf die Lügner
und den Bösewicht.

222 Sie flüstern ihm ins Ohr, doch
nichts als Lügen

223 Die Poeten folgen ihnen, und
lassen sich von ihnen betrügen.

224 Siehst du denn nicht, wie sie
durch alle Thäler schweifend
nimmer rhun.

225 Und Dinge sagen, so sie nimmer
thun.¹⁹⁾

これをゲーテは1行を2行にただけで、
〈Anklage〉という題をつけて次のように書き
移している。

Soll ich dir sagen auf wen die
Teufel niedersteigen

Sie steigen nieder auf die Lügner
und den Bösewicht

Die Poeten folgen ihnen und lassen
Sich von ihnen betrügen

Siehst du denn nicht wie sie durch
alle Thäler schweifend nimmer ruhn.

Und Dinge sagen so sie nimmer thun.²⁰⁾

この詩の後半についてもハマー＝ブルク
シュタルの『ハーフィズ詩集』の序文を手が
かりにしている。ハーフィズはイスラーム暦
791年（1388年12月31日～1389年12月20日）
に他界し、シーラーズ郊外の多くの人々から
愛されているモーゼラに埋葬されるのだが、
そのモーゼラへの埋葬についてハーフィズに

敵意を持つ者からコーランを冒瀆しているということでそれを阻止しようとする動きが現われた。そのため、ハーフィズの支持者との間で論争が起こり、それが中々決着をみなかった。そこで、オリエントで一般的に行われている方法、針で本のページを刺して当たったページに書かれていることに従うことになった。針が指したところには次のような詩句があったという。

歩みをハーフィズの墓から
逸らすことなかれ
喩え罪に陥ることがあっても
彼は天国を待ちこがれている(ター章41)²¹⁾

こうしてハーフィズはモーゼラに埋葬されるのだが、ハーフィズの詩は多くの愛読者を持った一方、厳格なイスラーム教信者からは冒瀆的であると見られるようなところがあった。ハマー＝ブルクシュタルは序文の中で次のようにも語っている。

「後になって、イスラーム教の法僧 (Mufti)、教主 (Scheich)、トルコの法律学者 (Ulema)、スーフィー教徒 (Sofis ; Sufi)、導師 (Imam)、修道僧 (Derwisch) や手引きが、ハーフィズの詩を人々の口に上らせないようにすることが不可能であると見てとると、恐らく彼らは、詩人と、そして、また、彼らの正当性を救うために、官能的描写を超自然的な比喻と、また、ハーフィズの言葉の全てを神秘的な言葉と説明しなければならなかった。それ以来、正統派のイスラーム教徒のもとではそのような解釈が信頼を保って来、シェミイ (Schemii) やスルリー (Sururi) は、ハーフィズのディーヴァン (詩集) を完全にその

ような立場から説明している。それに対してスーディ (Sudi) は、それとは違った見解を持つに十分な知性と勇気を持っていた。それについての賛否が非常に活発にシラーズにおいてばかりでなく、コンスタンティノーブルにおいても交された。トルコの法律学者たちが、この問題を有名なイスラームの法僧、その宗教的並びに政治的な律法のすべての問題に関する判決が規範にかなったものと評価されているエブスード (Ebusuud) の決定に委ねた。」²²⁾

そのような訴えについて取り上げたのが、上の「訴え」という詩である。

なお、ミルザという名の詩人はハマー＝ブルクシュタルの『200人のペルシア詩人の名詩選によるペルシア文学史』では7人取り上げられているがどのミルザかは特定できない。しかし、ここではハーフィズ以外の詩人という程度に受け止めておいてよいのと思う。

この「訴え」に対する判決が次の詩で示されるのだが、ゲーテはそのタイトルをペルシア語で (Fetwa) としている。

判決

ハーフィズの詩、それは
動かぬ真理を議論の余地なく言い表わしている

しかし、所々に、小さなことではあるが
法律の枠を越えるものがある
君が着実な歩みを望むなら、君は知らなければならぬ

蛇の毒と解毒剤とを見わけるすべを
だが、高貴な行為の純粋な喜びに

心楽しく身を委ねること、
永遠の苦しみに追われるばかりの行為から
慎重に身を守ること
それが過ちを犯さぬための最善の道
哀れなエブスードはこう記した
神よ、彼のすべての罪を許したまえ²³⁾

この詩もハマー＝ブルクシュタルの『ハーフィズ詩集』の序文の次の部分に依存したものである。

「判決 (Fetwa)

ハーフィズの詩は、多くの決定的で議論の余地のない真理を含んでいるが、ところどころにわずかではあるが、実際に法律の限界を超えるものが見られる。これらの詩の一つ一つを十分に判別して蛇の毒を解毒剤と見なすようなことをせず、善行の純粋な喜びに身を委ね、永遠の苦痛をとまなう快樂から身を守ることが、最も安全なことである。このように、あわれなエブスードは記したが、神はその罪を許し給わんことを。」²⁴⁾

そしてハーフィズを敬愛する西洋の詩人ゲーテは、上のような判決を下したエブスードに感謝の意を表さずにはいられなくなる。この詩に続く次の詩は「ドイツ人感謝す」と題されゲーテのトルコの法僧エブスードへの謝意である。

ドイツ人感謝す

聖なるエブスードよ、あなたの言う通りです
このような聖者をこそ詩人は望むもの
というのは、法規範の限界を越えた
まさにそのような些細なことこそ

詩人が尊大に、苦悩の中にあっても陽気に
振る舞える
ところの遺産であるからです
蛇の毒も解毒剤テリアクも
詩人は同じものと見なさざるを得ません
前者が殺すことも、後者が治癒することも
ないであります
というのは真の生は
永遠の清浄な行為であるから
そしてそれは己以外の誰をも害さないこと
を示すものだから
こうして老いた詩人は望むことが出来ます
フーリが天国で彼を神々しい青年として
迎えてくれることを
聖なるエブスードよ、仰せのとおりです²⁵⁾

この詩の13行から16行にかけての部分は、フランスのオリент学者シルヴェストル・ド・サシによるペルシアの神秘詩人アッタールの『忠告の書』の中からの仏訳「1人の人間のなす善も悪も、結局は、彼自身のしたことである」に基づくものであるとされている。²⁶⁾ 更に、これはコーランの41章46節と関連づけられる。コーランの41章46節は岩波文庫井筒俊彦訳では以下のようになっている。

「善功積むのも結局は自分自身のため、悪いことをすれば結局自分が損するだけ、神様は僕（シモベ）に不当な仕打ちはなさない」（下、86ページ）また、コーランでは同じ表現としてつぎの表現もある。

「ただ一粒の重みでも善をした者はそれを見る（それを見る、とは自分のしたその善事を改めて見せられ、それに応じた褒美を戴くこと）。ただ一粒の重みでも悪をした者はそれを見る。」（下、298ページ）

また、この詩では「フリーが天国で彼を神々しい青年として迎えてくれることを老いた詩人は望むことが出来る」と語っている。『西東詩集』では最後に「天国の巻」が配置され、最初の「歌びとの巻」の冒頭の詩の中でも天国やフリーについて歌われているが、度々天国が取り上げられている。その天国もイスラーム教の天国である。そしてコーランでは実に具体的に天国の楽園のことが描写されている。例えば、

2章23節「だが信仰を抱き、かつ善行をなす人々に向かっては喜びの音信を告げ知らせやるがよいぞ。彼らはやがて潺々と河水流れる緑園に赴くであろうことを。その(緑園の)果実を日々の糧として供されるとき彼らは言うことであろうて、「これは以前に(地上で)私たちの食べていたものとそっくりでございます」と。それほどによく似たものを食べさせて戴けるのじゃ。しかもそこで清浄無垢の妻たちを与えられ、そこに彼らは永遠に住まうのじゃ(「清浄無垢の妻」というのは、古アラビアの伝説で天上の楽園に住むと言われる神女フルhur即ち「白色の乙女たち」のこと。西欧ではペルシア化されたフリーという名で有名で、回教の天国の官能的性格を示すものとしてよく引かれる。回教の伝承によると、信者は死後楽園に入ると同時に彼女らに迎えられ、地上においてラマザン月に断食した日の数と、善事を行った数だけ彼女らと欲びを交えることが許されるが、しかも彼女らは永遠に処女であるという。)」(上、14ページ)

この他にコーランの中では、3章13節(上、75ページ)と197節(108ページ)、4章60節(上、121ページ)、22章23節(中、169-170)、

37章40-47節(下、38ページ)、38章49-54節(下、52ページ)、43章70-73節(下、104ページ)、44章51-57節(下、110ページ)、47章16節(下、126ページ)、52章17-28節(下、151ページ)、54章54節(下、162ページ)、56章11-25節(下、168ページ)、76章11-22節(下、248ページ)、78章31-35節(下、255-256ページ)、83章22-25節(下、268ページ)、88章10-16節(下、278-279ページ)等で天国の楽園のことが具体的に記述されている。

そしてこの天国には純白な肌に黒い澄んだ目の清浄無垢の妻たちが居て、それがフリーであり、『西東詩集』の中では天国の門番の役割を果たしている。詩人は、自分が天国に迎え入れられることを確信し、自分が共鳴するハーフィズを評価してくれた法僧エブスードに感謝するのである。

次の詩も「判決(Fetwa)」と題されたが、直接の動機はクネーベルからの1815年1月25日付の手紙である。クネーベルはこの書簡の中でトデリーニの『トルコの文学について』と題する著書からの抜き書きしたものを届けている。それによると、トルコの詩人ミスリが彼の詩や言動によって真のイスラーム教徒ではないかもしれないと疑いをかけられた。そこでムフティ(法律学者)がミスリの詩句がコーランに合致するか否かを裁決しなければならなかった。ムフティの裁決は「この詩の価値と意味は神とミスリ以外には誰にも分らない。」というものであった。そのため、ミスリの詩は発売禁止を免れた。しかしこの警告は次の言葉で結ばれていた。つまり、ムフティはこの詩と文を読み終わった後、これらを火に投じ、そして、次の判決を下したと。「ミスリにまねて語りかつ信じる者は、

焚刑に処せられるべきである。ただしミスリ・エフェンディは除く、なぜなら靈感に憑かれたものには判決を下すことは出来ないから」と。²⁷⁾

ゲーテはこの年の2月8日クネーベルに返信をしたため、「お伝え頂いた東方の真珠に心からお礼申し上げます。早速これも編みこみました」²⁸⁾と伝えているように、この「判決」という詩ではクネーベルの提供してくれた情報を下敷きになっている。

判決 (Fetwa)

ムフティはミスリの詩をすべて
ひとつひとつ読んでいった
そして慎重に考えた後でそれを火の中に投
げ入れた
美しく書かれたその書は消えてしまった

高位の法僧は言った、ミスリのように
語りまた信じる者はすべて火に焼かれよ
彼のみは火の苦しみから除かれよ
アラアがすべての詩人に才能を与えたのだ
から
もし罪の中で彷徨いその才能を乱用するよ
うなことがあれば
神と和解することに努めるべきだ²⁹⁾

ミスリはイスラーム暦1029-1111 (西暦1617/18-1699) の人。「ミスリ」という語そのものが「エジプト人」を意味するので、エジプト人か。托鉢僧を構成員とした教団の創始者といわれている。信奉者を多く集めたということもあった、彼の説教が政治的に危険であると見なされ問題にされた。この詩でも、まえ

の「判決」という詩でも、法僧の巧みな裁きで詩人の名誉が救われた。

次に続く詩もハーフィズ賛美の詩である。

果てしなく

終わることができないということ、そのことがあなたを偉大にしています
そして始めないということ、そのことがあなたの宿命
あなたの歌は星空のように廻り
始まりと終わりは常に同じ
真中がもたらすものは明らかに
終わりにあるものであり初めにもあったもの

あなたは喜びの真の詩人の源
そしてあなたからは無数に波また波が流れ出る
常にキスを待ち受けている口
常に飲むことを勝れている喉
愛らしく流れ出る胸の中の歌

たとえ世界の全てが沈んでしまうことがあろうとも

ハーフィズよ、あなたと、あなたとだけ
私は競い合いたい、楽しみも苦しみも
私たち双生児には一緒であってほしいもの
あなたのように愛することそしてあなたのように飲むこと
それを私の誇りとしたい、私の命としたい

さあ歌よ、自らの情熱で響き渡れ
なぜならお前はより古いから、より新しいから³⁰⁾

ゲーテのハーフィズに対する深い心酔の様子が窺える詩である。19世紀初頭のドイツの詩人ゲーテは、時間的にはかなり以前の14世紀の、しかも距離的には遠いペルシアの詩人ハーフィズと自分が双生児であるとまで言い切るまでハーフィズを身近に感じている。ゲーテはペルシア語の初歩的なことは学んだようであるが、ハーフィズの詩を原語で読めるほどまでにはペルシア語を理解してはいない。従って、彼のハーフィズ理解はあくまでもハマール＝ブルクシュタルがドイツ語に翻訳した『ハーフィズ詩集』によるのみである。しかも、現在ではそのハマール＝ブルクシュタルのドイツ語訳も優れた訳とは見なされず、後のローゼンツヴァイク＝シュヴェナウの訳³¹⁾の方が優れているとされているのだ。ゲーテはこのハマール＝ブルクシュタル訳の『ハーフィズ詩集』を仲介としてハーフィズの詩に迫り、見事にその詩心を受け止め共鳴することが出来たのだ。³²⁾

注

- 1) 《Der Diwan von Mohammed Schemsed=din Hafis. Aus dem Persischen zum erstenmal ganz übersetzt von Joseph v. Hammer》このタイトルページに第1巻は1812年、第2巻は1813年と記されているが、実際にはこの両方とも1814年の復活祭見本市の時に出版されたものである。《Goethes Leben von Tag zu Tag. Eine dokumentarische Chronik von Robert Steiger und Angelika Reimann》では、「あるいは、5月10日にライプツィヒからコッタに送ってもらって」とある。Bd.6, S.71.
- 2) Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, hrsg. von Karl Richter (以下 M.A. とする). Bd.14. S.239.
- 3) M.A. Bd.11.1.2. S.32.
- 4) 黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』(東洋文庫 299)、平凡社、152ページ。
- 5) 同上、212~213ページ。
- 6) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe (以下 H.A. とする) Goethes Briefe, Bd.3, S.307.
- 7) ibid
- 8) H.A. Goethes Briefe, Bd.3, S.307.
- 9) Johann Peter Eckermann, Gespräche mit Goethe in der letzten Jahren seines Lebens, 1823-1832, Vollständige Ausgabe in 2 Bden., hrsg. von Ernst Merian-Genast, Basel, 1945. Bd.1, S.68.
- 10) J. W. v. Goethe, Werke, hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen, Weimar, 1887ff. (以下 W.A. とする). III. Abt. Bd.5, S.186.
- 11) H.A. Goethes Briefe, Bd.3, S.329.
- 12) W.A. III. Abt., Bd.5, S.204.
- 13) H.A. Bd.2, S.268ff.
- 14) Mohammed Schemsed-din Hafis, Der Diwan, Aus dem Persischen zum ersenmal ganz übersetzt von Joseph von Hammer-Purgstall, 1973, Georg Olms Verlag, Hildesheim-New York, (以下 Hafis, Diwan とする) Bd. I. S.367f.
- 15) Hafis, Diwan, Bd. I. S.368.
- 16) M.A. S.22f.
- 17) Hafis, Diwan, Bd. I. S.IX.
- 18) M.A. S.23.
- 19) Fundgruben des Orients, bearbeitet durch eine Gesellschaft von Liebhabern auf Veranstaltung des Herrn Grafen Wenceslaus Rzewuski. Wien, Bd.3, S.255.
- 20) Goethe West-östlicher Diwan, Kritische Ausgabe der Gedichte mit textgeschichtlichem Kommentar von Hans Albert Maier, Kommentar, (以下 Maier とする) S.118f.
なお、この Maier ではコーラン222節に対応する部分が抜け落ちている。
- 21) ハマール＝ブルクシュタルは、ここで、この詩句が「ター」章の41番目と指示しているが、これは間違いで、「ター」章の39番目の詩の1節である (Hafis, Diwan, Bd. I. S.105).
- 22) Hafis, Diwan, Bd. I. S. XXX II f.
- 23) M.A. Bd.11.1.2. S.24.

- 24) Hafis, Diwan, Bd. I . S.X X X IV.
- 25) M.A. Bd.11.1.2. S.24.
- 26) Maier, S.122f., M.A. Bd.11.1.2. S.483.
- 27) Werke Goethes. hsg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. West-östlicher Divan. 1952. Akademie-Verlag Berlin. Bd.3, S.250.
- 28) H.A.Goethes Briefe, Bd.3, S.293.
- 29) M.A. Bd.11.1.2. S.25
- 30) ibid.
- 31) Hafis, Der Diwan des großen lyrischen Dichters Hafis, im persischen Original herausgegeben, ins Deutsche metrisch übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Vincenz Ritter von Rosenzweig-Schwannau, Wien, 1858ff.
- 32) 紙面の都合によりここで中断する。